平成22年度
研究成果

名古屋都市センター研究成果

平成22年度の研究の概要をご紹介します。
なお、研究報告書は名古屋都市センターのまちづくりライブラリーで、
概要版はホームページでご覧いただけます。

http://www.nui.or.jp

特別研究

研究テーマ

都市における生態系サービスの把握と指数に向けて ～生物多様性と地方自治体における暮らし・食と観光のまちづくり～

名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授　香坂玲

はじめに

生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の会期中に開催された「生物多様性国際自治体会議」において、生物多様性とその管理に関する状況を評価する手段について議論されたように、生物多様性評価のための地方自治体単位での指数づくりが世界的にも注目されている。生物多様性評価にあたっては、直接的に利用する供給サービスだけでなく、環境教育や観光振興、レクリエーション等の間接的に利用するサービス、防災を含む調整・制御機能等、幅広い観点から検討される必要がある。
本研究では生態系サービスの観光やレクリエーションの機能に踏み込んで、指数のあり方を検討した。

生物多様性の数値化の事例

「生態系と生物多様性の経済学」（TEEB）では、生物多様性への影響や生態系サービスの「見える化」（金額や統計など定量化、数値化での把握）が行なわれている。ただ生態系サービスを定量化し、経済評価を行うだけではなく、行政や事業者など対象のターゲット層別に行動できる「事例・アイディア集」にもなっている。さらに、経済的な価値で捉えられる範囲が限られることにも自覚的であり、貧困層への偏った影響、世代間の不平等なども言及されている点では、倫理や公平性などの議論をし、倫理や道徳について考える「普及・啓発のツール」にもなっている。

世界観光機関（UNWTO）では、生物多様性と観光に関わる指数づくりについて、モニタリングの領域のなかで議論をしている。UNWTOにおける指数は、生物多様性の「環境」と、「社会・文化」、「経済」の要素を同じように位置づけている。また、観光に関わる領域においても、生物多様性を題材として、どのような製品やサービス業によって、どのような収入が生まれ、何人の雇用を生み出しているのかという、経済や雇用に関する指数も環境に関わる指数と同じレベルで位置づけて注視するべきと指摘しており、名古屋市の施策を考える上でも重要である。

名古屋市と生物多様性

「観光」の観点からその関わりを見ると、名古屋市観光戦略ビジョン（平成22年12月）によれば、名古屋市における観光客に人気の訪問地は熱田神宮、東山動植物園、名古屋港水族館であり、いずれも生物多様性に関わりが深い資源であることがわかる。

次に、「食」の観点から関わりを見てみる。名古屋市が平成20年度に実施したインターネットアンケート調査では、「なごやめし」の認知度が「熱田神宮」などと並んで全国的に高くなっている。「なごやめし」のように、地産品は観光振興をもたらすと同時に、地域の豊かな生物多様性に支えられていることにも留意する必要がある。

なごや指数に関する提案

DID面積比率が84%と市域の大部分が市街地である名古屋市においては、生物多様性の維持・向上に努めようとする取り組みや、人工的な自然を創出しようとする取り組みを評価するなど、都市生態系の実態に見合った指数開発が必要である。前述のとおり、「観光」や「食」の観点から当該市の生態系の実態を反映可能な指数を設定することも必要である。

観光の観点では、近年、「エコツーリズム」や「グリーンツーリズム」などその土地の自然を対象とする観光が注目され、広まりつつあるが、こうした参加者への教育・啓発を兼ねた観光は、間接的に都市における生物多様性の維持・向上等に寄与すると考えられる。具体的な指数としては、なごや東山の森等における「エコツアーの開催数」、「ツアーガイドの数」等を設定することが考えられる。

食の観点では、例えば、地産の充実度を測る具体的な指数として、「地産地消の販売店数」等を設定することが考えられる。

最後に、今後は、国際自然保護連合（IUCN）が発表予定の報告書や地域的には名古屋市が進める生態系サービスの見える化事業などの動向が注目される。

真夏のビアパーティプラン
2011.7.1（金）～8.31（水）
Dinner / 5:30pm～9:30pm（L.O.8:30pm）
29F中国料理「花梨」
1名様 ¥8,000 フリードリンク（2時間）付
（税金・サービス料込）　※6名様より・要予約

ANA CROWNE PLAZA HOTEL GRAND COURT NAGOYA
〒460-0023 名古屋市中区金山町1-1-1
www.anacrowneplaza-nagoya.jp
ご予約・お問い合わせ Tel.052-683-4111（代）

名古屋における計画道路の歩み概観 ――古代から市区改正まで――

名古屋都市センター　専任研究員　杉山正大

道には踏み分け道のように自然発生的にできるものもあるが、狩猟採集時代は知らず歴史時代に入ってからは、事前に経路、構造などを計画して築造する道が多いと考えられる。近代に入ってからの都市計画道路は、そうした計画道路の中でももっとも中心的な存在であろう。名古屋における都市計画道路は、1924(大正13)年の最初の都市計画決定を嚆矢とするが、その決定に至るまでには多くの計画の営為があったと想定される。

本論では、古く古代にさかのぼり、最初の都市計画決定に至るまでに、現在の名古屋市域において、どのような道路が計画され、築造されてきたのか、また、その計画意図はどのようであったのか、さらには、そうした経緯が後の計画道路にどのような影響を及ぼしてきたのかを探ることとした。

古代東海道(駅路)は近世東海道より内陸にあり、直線的なルートであった。

中世東海道にあたる鎌倉街道は、名古屋市内西部ではほぼ古代東海道を踏襲したようであるが、東部ではやや海沿いに南下し、時代によって複数の経路があった。また、名古屋城築城以前は、かつては純然たる農村との見方もあったが、部分的に市街化しており、計画的な道路も存在していた説が有力となっている。

近世には清須越による計画的な城下町が形成され、南北の本町通と東西の伝馬町筋が幹線となった。両者を基本として周辺と連絡する街道が整備された。また、碁盤割南端の堀切筋が万治大火後に拡幅されて広小路となり、近代の幹線となる端緒を開いた。

近代に入って、鉄道駅との連絡や市電を敷設する必要などから近世以来の狭い道を個別に拡幅する事例が相次いだ。こうした個別対応によらない体系的・計画的な整備の必要から名古屋市は東京市区改正条例の準用を要請した。検討段階では路線網の体裁をなしていたが、1919(大正8)年に認可となった市区改正設計は、市電敷設のため急施を要する五大幹線道路のみとなった。同年に都市計画法が公布され、翌年施行されたため市区改正設計五大幹線の整備は、都市計画法に基づく都市計画事業として行われた。

なお、本論は日本都市計画学会中部支部「アーバン・レガシーの活用　名古屋開府400年の遺産を生かす」(2010年11月)に寄せた同名の論考に加筆したものである。

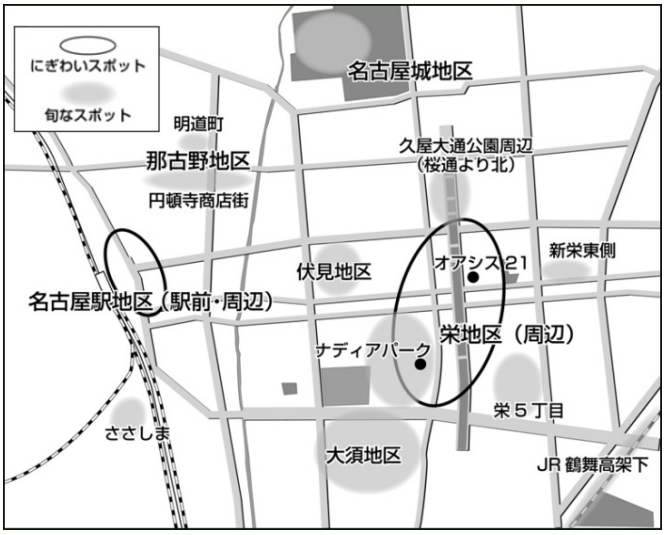
「なごやの賑わいスポットと旬スポット」

元名古屋都市センター　調査課　井村美里

人は何に惹きつけられて、まちを訪れるのか。たくさんの人がいる楽しそうな場所?行ってみたいと思わせる何かがある場所?そこにしかない個性や雰囲気を感じられる場所?

今、名古屋の街なかのどこに、どんな魅力を、人が感じているのか。まちの魅力を「賑わいの場所」「旬なスポット」という切り口で捉え、アンケートとグループインタビューという2種類の手法で調査した。それらのスポットの動向を探り、人々が何に惹かれてまちを訪れるのかを知ることで、これからの都市の魅力づくりに役立つものと考えている。

アンケートによる調査では、名古屋の街なかの賑わっている場所と、流行の最先端・旬なスポットをそれぞれ挙げてもらった。結果は、賑わっている場所・旬なスポットとも名駅、栄、大須が挙げられたが、その順位は異なり、賑わい≠旬という意識が浮かび上がった。また、旬なスポットにはそこ以外に名古屋城や伏見が挙げられ、武将隊やトリエンナーレ等のイベントで情報発信量の多い場所を旬と感じている結果となった。

少人数の対象者に対して座談会形式で質問を繰り返し、対象者の心理や価値観を引き出すグループインタビュー調査は、建築系女子学生を対象に行い、賑わっている場所と、旬な・面白い・興味ある場所、そこを挙げる理由を聞いた。結果は、賑わっている場所として栄の大津通や名古屋駅のミッドランドスクエア、金時計等が挙げられ、人が集まることで活気を感じる場所を「賑わい」と理由つけていた。旬な・面白い・興味ある場所には栄ミナミのカフェや雑貨店、名駅の新ビル建設、大須のレトロ感等が挙げられ、レトロな雰囲気やカフェ、住んでいる人がアクティブなことを「旬」と理由つける結果となった。この他、賑わい、旬ともに円頓寺や長者町、覚王山商店街や鶴舞JR高架下、久屋大通の桜通より北側等も挙げられた。

レポートでは、これらの結果を踏まえ、賑わいの場所と旬なスポットに関する考察を深め、まちづくりへの展開について述べている。